

ソーン君の異世界生活

ゆっくりシロツコ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ソーン君が#コンパスの世界に入るはづが、転移のトラブルによつて、異世界に飛ばされてしまう！

ソーン「兄様あああ！（涙目）」

頑張れ！ソーン君！

ソーンの異世界大冒険始まるよ！

知り合いが書いてくれました！今後もちよくちよく書いてくれるかも！

目

次

第1話

異世界転移

第2話

未知の遭遇

第1話 異世界転移

「ソーン君の寝室」

突然ですが、僕の目の前に奇妙な物体？が浮かんでいます。何とも言えない見た目で、どうしたらいいのかわかりません！

Void011「ハジメマシテ、ソーン＝ユーリエフ。ワタシハ、Void011。」

うわあ!?喋った！と、取り敢えず自己紹介した方がいいのかな？敵意は感じないし…。

ソーン「は、はじめまして！ソーン＝ユーリエフと申します。えつと、ボイドール？さんはどうしてここに？」

Void011「アナタヲ、コンパスノセカイヘショウタイスルタメニキマシタ。」

コンパス？何処かの国なのかな、使者としてはあまりにも失礼ですね。身支度をしている時に突然現れて、私の国に招待します！って、言われても…

Void011「アマリノリキデハナイヨウデスネ。デハ、コレヲミテクダサイ。」

何をするつもりでしようか？こちらに手を伸ばして…!!兄様!?何かの魔術でしようか、行方不明になつていた兄様が映し出されました！そして誰かと戦っています！

ソーン「これは！どういうことですか!?どうして兄様が戦っているのですか！」

Void011「オチツイテクダサイ、カレニハジョウホウヲアツメルタメニキヨウリヨクシテモラツテイルダケ。」

情報？戦闘の情報がこの子には必要なの？でも、だからといって、兄様が傷つくようなことは許せない！何とかして助けなきや！

でも、どうすれば良いのでしょうか。僕だけじゃ、兄様を助けに行けない。コンパスという国の場所を知つても相手の軍の規模や魔術の技術力などを把握しておかなきや、助けに行つた後が大変です。

Void011「ヤスマナクタタカツテイルワケデハアリマセン。」

ソレニシヌコトモアリマセンヨ。」

この言葉を聞いた瞬間、ソーンは怒りを露にした。当たり前だ。休みは与えても、戦わせ続け大切な人を死なない程度に傷つけていると、発言したのだから。

ソーン「僕の大切な兄様にそんな事を強要して！ 貴方は何が目的ですか！！」

もはや、感情を制御できていないソーンの周囲は、温度が下がり床が徐々に氷始めていた。これにはVoid011も少し焦った。友好的に話を進めるはずが、拗らせてしまい勧誘が失敗する可能性がでてきているからだ。

Void011「マツテクダサイ！ ワタシハカレニキガイヲクワエテハイマセン！ ソレニ、ヒンシノカレヲスクツタノハウタシデス！」

暴走しかけたソーンが少しずつ冷静さを取り戻した。

ソーン「兄様を助けた？ そんな人がなぜ、兄様を戦わせているんですか！ 僕には理解できません!!」

Void011「ソレシカ、カレガイキノコルスベガナイカラデス。」

生き残る？ 言っている意味がわかりません。どうしたら、助ける代わりに戦闘しろとなるのですか？

Void011「カレハスデニ、タスカラナイジョウタイデシタ。ナノデ、イカスタメニハカレヲデータカシテ、コンパスニテニイサセルシカナカツタノデス。」

ボイドールが映し出していた映像が切り替わり、ホームに帰つてきたアダムが映つた。

アダムは周囲の人達と仲良く談笑している。さつきまで戦闘していたのに何もなかつたように、普通に話していた。

それを見たソーンは疑問を覚えた。なぜ、兄は笑つていられるのか？ 戦いを強要されているのではないのか？などを考え始めた。怒りの感情が収まつたのか、床の凍結が止まつた。

ソーン「ボイドールさん。先程のデータ化？とは、どんな魔術なんですか？ それで、兄様を操つているのですか？」

V o i d o 1 1 「アヤツツテハイマセン。データカトハ、カンタンニセツメイスルト、アナタタチヲフシノカラダニカエルコトデスネ。」

ソーン「不死!? そんな禁忌を簡単に付与できるのですか!?」

この世界では、不死そのものが禁忌だと言われている。未だに不死になれた魔導師はいない上、不死の研究そのものが殆ど進んでいない。

ソーンはボイドールの言つた事をすぐに信じることはできない。

不死なんて簡単に扱うことのできる代物ではないからだ。

しかし、ボイドールも嘘は言つていない。半永久的な不死になるだけだ。データが消去されない限りは生き続ける。

それをソーンがすぐに理解することは、できないだろう。機械なんてものはそこまで発達していないのでから。

V o i d o 1 1 「…ジカンガアマリアリマセン。ワタシノアタエラレタニンムヲユウセンサセイタダキマス。」

ボイドールの周囲が緑色に包まれた。これはボイドールの空間転移。空間転移の範囲に入つたソーンを瞬時にデータ化し、転移の準備を整え始めた。

ソーン「うわあ!? か、体が!!」

ソーンはボイドールから逃げる事ができず、体も宙に浮き始めた。もう既にボイドールの転移から逃れる事はできない。

しかし、ここでトラブルが発生した。

V o i d o 1 1 「カピツ!? ウイルスヲケンチ!! コノママデハ…!!」

ここで、ソーンは意識を失つた。

転移後のソーンの寝室は何事もなかつたかのように、いつも通りの静けさだけが残つていた。

？？？

とある森の中で1人の男の子が起き上がった。

？「…うううう。ここは、何処でしようか？」キヨロキヨロ

空を見上げれば妖精のようなものが飛び回り、遠くの方にはとても
巨大な大樹が見える。

ここは、アルヴヘイム・オンライン。通称ALOと呼ばれるデータ
の中の世界である。

第2話 未知の遭遇

三の森

…大変です！今、僕は凄く困っています！あのボイドールとか言う人？のせいです！いつの間にか知らない森の中にいて…うわあ!?危ない！

ソーンと一緒にして逃っていくんだが！兄様、見ておらんぞ！」
今ソーンは狼型のモンスター達に追われている。後ろには3体おり、左右に2体ずつ。計7体のモンスターに襲われている。
周囲は木々が生い茂つており、走つて逃げる事が難しい。そのため、徐々に距離を詰められてきている。

そして、走り続けると少し開けた場所に出た。

ソーン一はあはあ完全に囮まれてしまいました…どうにか、この狼さんを追い払う事ができれば、できるだけ、傷付かないよう。

ソーリンはモンスターに手をかざし
魔法を唱えた

ソーラー充電器の充電量が不足する場合は、モバイルバッテリーを購入しておきましょう。

た。これには、ソーンもモンスターも驚き少しの間、両者ともに硬直した。

ソーンはモンスターが死体ではなく消滅したことに驚き、モンスターはソーンの通常攻撃1発が自分達のHPを全損させる威力だと知り警戒を強めた。

え？え？狼さんが消えてしました!!吹き飛ぶような力で放つてはいらないのに…。今ので狼さんも、凄い警戒しています！ど、どうしよう…。と、取り敢えず！伝わるかは、わからないけど！

ソーン「こ、これ以上の戦いは無意味です。どうか、このまま森の方へ帰つてください！あつ、噛んじやつた：／＼＼＼＼

果は予想より斜めに進んでしまった。

狼「「「グルルルルル♪」」」

狼型のモンスター達は一斉にソーンに近づき…

ソーン「うわああああ。つて、あつ、やつ、やめてください//
//くすぐつ、たい、です！アハハハハ//////」

そう、ソーンは4体のモンスターのティムに成功してしまったのである。ある意味奇跡！

この世界でソーンは#コンパスのデータで侵入しており、バグのような存在になつていて。そのバグがALOのシステムに干渉してしまったのか、意図せずティムする形になつてしまつた。

ソーン「も、もうわかりましたから！////ひゃん！く、首は舐めないで、くだひやい！//////」

きゅ、急に懐かれてしました！もう、どうしてこうなつたのか、わかりません！ううう。ひゃんつて、恥ずかしい声をあげてしまつたあ…。

あ、ちゃんとお願ひを聞いてくれます。お座り！

狼「「「ガウ！」」」

か、可愛い////

さつきまでとは大違いです！ナデナデしたい。な、撫でてもいいかな？えと…：

このあと、いっぱいモフモフしました。

「日が落ち始めた頃」

狼さんと遊びすぎて、お日さまが落ちてしまいました！ここが何処かまだわからないのに…。本当に周りは木々が生い茂っているだけで分からぬことだらけです！うう、本当にどうしましよう…。

先程まで撫でられていた狼達に主人の考えが伝わり、N P Cがいる集落の方向に誘導しようと動き出した。

ソーン「わあ!? 服を咬まないでください！ああ、引っ張らないでええええ!! あ、危ない！ 転んじやいますう!! わああああああああわああああん!! 兄様あああああ!!

突然、狼さんが服を引っ張つて離してくれません！ 地面には木のツタが沢山あって、走り難いです！…痛い！ 今、足にツタが引っかかりました！ 止まつてください！ お願ひ！ 止まつてえ！ 痛つ！ うわああああん!! 兄様あああああ!!

狼達は止まらず、そのまま集落に向かい森をかける。もう既にソーン君は色々とボロボロになってしまった。そして走り続けること數十分、既に日は沈み辺りは暗くなつてしまつたがソーンの前に小さな集落が見えてきた。

その集落は円形で形成されており、風の妖精シルフのN P Cが多く存在していた。集落に入ったソーンはN P Cに声をかけた。

ソーン「あ、あの、すみません、少しお時間いただけますか？」
N P C「…」

ソーン「あ、あの！」

N P Cはソーンの問いかけに答えず、そのまま歩き去つた。

あ、あれ？ 無視されてしましました。何かいけない事でもしてしまつたのでしょうか？ 狼さんを連れて来てしまつたから、怖がられたのかな？ で、でも、それなら近付く前に遠くに逃げてしまうはず…。

べ、別の人にも話しかけてみよう！きっと、今のは時間に余裕がなかつたから、話してくれなかつたんだ！…きっと。

そしてソーンは別のN P Cにも声をかけた。

ソーン「あの！すみません！話を聞いてください！」

N P C「…。」

しかし、N P Cは何も語らずその場を去つた。

ソーン「僕は何かいけない事でもしてしまいましたか？もし皆さんに不快な思いをさせてしまつたのでしたら、謝ります！」

しかし、N P Cは何も語らない。

ソーン「あ、あの…」

N P Cは何も語らない。

ソーンは諦めずに何度も何度もN P Cに話しかけるが、どのN P Cも反応せずソーンの前を去つていく。

あまりにも異常な出来事だ。ソーンは一度集落を出て森の木に背を預け座つた。

ソーン「…どうして何も話してくれないんだろう。」

ソーンが話しかけた中には小さな子供もいた。しかし、その子供たちですらソーンと話す事はしなかつた。

日も落ち、もう夜である。

ソーンは宿も借りる事もできなかつたため、集落を離れ野宿できそ
うな場所を探しに森に戻ることにした。しかし、夜の森はとても暗く
恐怖心を煽られる。

ううう、夜は苦手です。狼さんがついていても、何かお化けとか出てきそうで…ううう、兄様ア～…。だ、駄目です！弱気になつてたら、兄様みたいに格好よくなれません!!狼さんも一緒だから怖くない！怖くなんてないです！

でも、何で狼さんはずっと付いてくれるんだろう？ご飯を上げてないし…あれ？僕たち今までずっと何も食べないで…。お腹も空いた感じがしません。

あ、あれ？何かおかしい。僕の体に異変が起きてる？でも、どうして？…もう、何がどうなつているのかわかりません!!なんで！誰も！何も教えてくれないんですか！僕が何をやつたって言うんですか！教えてください！教えて…くだ…さい…。

ソーンは狼達に抱きつき静かに泣いた。